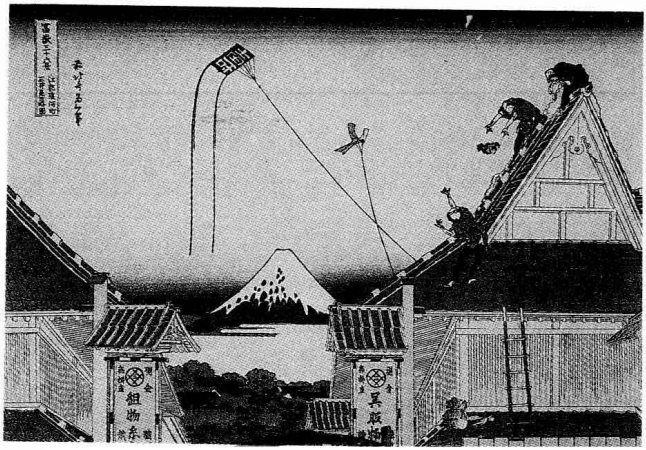
歴史の知恵
経済のヒント

竹内 宏

PHP研究所

歴史の知恵
経済のヒント

竹内 宏



PHP研究所

〈著者略歴〉
竹内　宏（たけうち　ひろし）
昭和5（1930）年、静岡県清水市生まれ。昭和29（1954）年、東京大学経済学部卒業。同年、日本長期信用銀行入行。調査部長、専務取締役調査部長を経て、現在、長銀総合研究所理事長。また、（財）静岡総合研究機構理事長ほか各種団体の会長、委員を兼務。
主な著書に『路地裏の経済学』『経済の知恵　経済からの発想』（日本経済新聞社）、『柔構造の日本経済』（朝日新聞社）、『竹内宏のちょっとエコノミー』『落ち穂拾いの経済学』『竹内宏の経済世相学』（講談社）、『竹内宏のやわらかな頭が商機をつかむ』（中経出版）、『竹内宏の経済ウォッチング』（日本実業出版社）、『現代エコノミスト選集 竹内宏集』（NTT出版）、『竹内宏の「蟻の眼、鳥の眼」経済学』『父が子に語る日本経済』（PHP研究所）など多数。

歴史の知恵・経済のヒント

1994年11月4日　第1版第1刷発行

著　者　竹内　宏
発行者　江口克彦
発行所　PHP研究所
東京本部　〒102 千代田区三番町3番地10
第一出版部　☎03-3239-6221
普及一部　☎03-3239-6233
京都本部　〒601 京都市南区西九条北ノ内町11
☎075-681-4431
印刷所
製本所　図書印刷株式会社

© Hiroshi Takeuchi 1994 Printed in Japan
落丁・乱丁本は送料弊所負担にてお取り替えいたします。
ISBN4-569-54495-9

歴史の知恵・経済のヒント

目次

序章　歴史に学ぶ経済再生のシナリオ　9
不幸な歴史ブームの時代／八方ふさがりの日本経済／経済力を取り戻す六つの大改革／土地私有となれ合い文化／米社会の強さと弱さ／動きはじめた歴史

第一章　封建体制と市場経済の力　23

織田信長・長期繁栄のシステムづくり　24
めざましい技術革新／水田の大開発／戦争のプロ集団を組織／強国ポルトガルへの接近／情報の収集システム／中世への訣別を果たした偉人

大石内蔵助・藩倒産後の生き方　35
経済成長と財政赤字の拡大／秩序と儀礼の時代／日本的リーダーの要件／四十七人を一つにまとめる／ロイヤリティーと法の道

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

徳川吉宗・市場経済との戦い 47

中興の名君／経済発展と消費財産業の成長／米価の低迷／支出膨張による構造的財政危機／幕府の支配力を強化する行政改革／消費税タイプの税制を導入／民間活力を利用した新田開発／最重要課題としての米価引き上げ／幕藩体制の本質的限界／率先垂範のリーダー／社会保障と都市改造

徳川宗春・ケインズ政策の失敗 67

吉宗と対照的な華美な生活／「上の華美は下の助けに」と信じた誤り／ヒューマニスト藩主の末路

田沼意次・繁栄と賄賂 74

駄目な二代目、三代目に仕えた名家臣／流通業への課税で税収増大／市場介入によるコントロール／貿易の拡大と通貨の統一／大名貸付で手数料を稼ぐ／金まみれによる失脚

上杉鷹山・企業家藩主 84
藩存亡をかけた大倹約運動／農業振興のための諸施策／藩主導による強力な工業化／近代化を先取りした優れた支配力

二宮尊徳・幕末の再建屋 95
身近な手本・二宮金次郎／「再建の名人」と呼ばれて／まず「分度」を決める／リーダーは何を実践すべきか／小さいことを積み上げる／予測される危機への準備／幕藩体制下での改革の限界

第二章 **繁栄の原型を探る** 109

豪商の世紀——政官財の癒着 110
経済成長・国際化と豪商の出現／権力者との癒着／東アジアとの交流／山田長政のロマン／海外技術の吸収

佐藤信淵・日本的経営のルーツ 122
「任せられ」れば「骨を折る」／才知より「人情」と「おかしみ」／賃金は平等に、手当は厚く／社内購買から娼婦宿まで／日本的経営のバイブル

家訓——企業倫理の原型 132
都市の発達と大商人の登場／低位安定時代の経営の基本理念／現代に通じる〝家訓〟の教え／経営者たるものの心得／薄利多売の正しい道

高田屋嘉兵衛・正義が生んだ利益 144
物流需要の高まり／航海の天才から大企業オーナーへ／民間外交官としての晩年の活躍

渋沢栄一・国家を背負った経営者 154
最悪な国際環境を克服した三つのメリット／すばらしい民間活力／資金調達力の強さ／企業の製造者として／時代に棹さした人生／壮大なジョブ・

ローテーション／論語と算盤／祖先の血と涙と汗の上に

第三章　時代を超える生き方の極意　171

北条早雲・遅咲きの大物　172

転機を生かす才覚／卓越した政治感覚／先駆者は皆アウトサイダー

武蔵と小次郎・勝敗の分かれ目　180

心理作戦と現場把握の差／置かれた立場の差／「型」と「型破り」の差

小林一茶・自分を売り出す　188

華やかな江戸に出る／米農業の衰退と天明の大飢饉／寛政改革下で俳句マーケットを開拓／「野暮な時代」に訴える作風／貧乏というブランド／不景気な時代の俳句ブーム

清水次郎長・侠客から事業家へ　208
悠々たる晩年／私にとっての次郎長／次郎長と江戸城開城／新しい時代に
市中警固役として／お泊まりさん受け入れ／「壮士の墓」／事業家としての
後半生／天田五郎の『東海遊侠伝』
あとがき
参考文献

裝幀——上田晃鄉

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

序章　歴史に学ぶ経済再生のシナリオ

不幸な歴史ブームの時代

世の中が行きづまり、不安が拡がると、哲学や宗教が盛んになり、歴史から何かを学ぼうという人が多くなるものだ。それによって、人々は不安をのがれ、新しい生き方を発見しようとする。

平安の貴族社会が崩壊して、武士社会に変わった混乱期には、鎌倉仏教が民衆に拡がった。戦国時代には、一向宗やキリスト教が北陸や九州の人の心をしっかり捉えた。

徳川時代になって元禄を過ぎる頃、封建体制が行きづまると、朱子学が多様化し、国学が起こり、心門哲学の信者が増えた。また、国学と共に、日本歴史の深い探求が始まった。幕末の志士達は、国学や陽明学で心を武装し、維新に命をかけた。

昭和の初期に、日本経済は世界恐慌に巻き込まれ、農村は貧困の底に苦しみ抜いた。その時、ファシズムやマルキシズムや西田哲学等の新思想が若者の心を捉えた。

現在の日本経済はすっかり行きづまり、脱出の出口が見えない。それを反映して、政治が混乱している。いろいろな新宗教が登場して、熱烈な信者が生れている。しかし多くの日本人は根っから宗教心に欠けているし、哲学は、むずかしくて近づけない。そういう人にとって最も手取り早い手法は、歴史から教訓を学ぶことだ。

歴史には、現在にそっくりの行きづまり状態や、現在とまったく同じような混乱した状況

が、何回となく現れた。歴史はいろいろな立場の人達に対して、それぞれに深い示唆を与える事件や、行動の鑑（かがみ）となる人物を用意し、私達の悩みに答えてくれる。現在は、不幸にも、歴史ブームが起きてもおかしくない時代だ。

八方ふさがりの日本経済

日本経済は、すっかり弱くなった。日本経済の成長率は、昭和三十年以降、大体二十年ごとにガタッと低下している。昭和三十年代から四十年代中頃までは、年率一〇パーセントの高成長であったのが、それ以後の二十年間は四パーセントの中成長に変わり、最近数年間は一パーセント以下の低迷状態に転落してしまった。

これに対して、アメリカ経済は再び強くなり、自動車の生産額は日本を抜いて再び世界一の座にすわり、コンピュータ・ソフトやマルティメディア等、最先端技術分野では、日本を引き離しつつある。

ＮＩＥＳ諸国は、重化学工業や、半導体、エレクトロニクス機器等の分野で日本を追い上げ、韓国はついに、日本に代わって世界一の造船国になった。

日本の企業は、国内生産のコストが高くなり、外国製品との競争に勝てないので、続々と生産拠点を海外に移転している。ＡＳＥＡＮ諸国や中国には勤勉で低廉な若年労働力が大量に存在している。

家電工業や繊維工業やエレクトロニクス工業等の生産拠点は、ＡＳＥＡＮ諸国や中国に移りつつあり、日本への逆輸出が増える一方だ。すでに日本は、カラーテレビの輸入国になった。このままで推移すると、日本から急速に工場が減り、日本経済は確実に空洞化するはずだ。

日本の将来を考えると、思わず、ゾッとすることもある。出生率が急速に低下したので、今後、若年人口は減る一方だ。工場が海外へ移転し、かつ、働く人数が減少すれば、日本経済は、衰退の方向をたどる可能性が大きい。

その上に、長寿化の傾向が強まり、かつ団塊の世代という人口のコブが高年齢化し、老人の数は激増の一途をたどるから、働ける人口のうち、かなり多くの人数が、老人の介護にとられてしまう。そうなると、生産活動に従事する人数がもっと減り、日本経済が衰退する可能性はずっと大きくなる。つまり、日本は、これから次第に貧しくなりそうだ。

また来世紀の世界は、乱れそうである。かつての冷戦構造の下では、米ソの二大国が、世界を二分して、圧倒的な影響力を与えていた。ところが、この構造が崩壊すると共に、二大国の圧力が失われ、旧ソ連圏を中心として、民族運動が燎原の火のように拡がり始めた。中東やアフリカでは、民族紛争と宗教紛争とが複雑にからみ合い、解決の展望が開けそうもない。

そうした時、東アジア諸国の経済成長力が著しく高まり、政治的プレゼンスも大きくなった。中国と東アジアの華僑社会の経済は今後強まる一方であり、それと共に、世界における中国の軍事的影響力は一段と強大になってきた。ことによると間もなく、中国は軍事的にアメリ

カと対抗できる国になるかもしれない。

来世紀に入ると、経済力が弱くなった日本は、世界と東アジアの激動の中で、もみくちゃにされ、つぶされそうになるだろう。

経済力を取り戻す六つの大改革

こうしたことから逃れるためには、経済の分野では少なくとも次のような改革を実行しなければならない。

(1)土地については、原則として、公共的使用が、私的な使用よりも優先するという法制にすること

(2)土地税制を改め、土地を所有する負担をもっと大きくし、不必要な土地の所有を不可能にすること

(3)流通・サービスや農業等、生産性が極めて低い産業では、規制を大幅に緩和して、激しい競争が発生するようにすること

(4)例えば道州制の導入のように、中央政府の縦型行政システムの改革を実施すること

(5)首都移転をはじめとした思い切った都市政策を実施すること

(6)男女どちらもとれる有給の出産休暇や育児休暇の制度をつくること

こうした大改革に成功すれば、地価が下がり、大型の都市改造投資や大規模なインフラ投資

を実施することが可能になる。国内の投資が拡大すれば、経済の実力以下の円高傾向は止まる。また、流通サービス業や農業は、競争が激しくなると共に、生産性は向上するだろう。そうなると生活費が安くなり、国際的に比較した賃金水準の異常高は、解消するだろう。経済の空洞化のテンポがかなりゆるくなるはずだ。

また首都の移転や地方分権によって、過密過疎問題が緩和され、首都圏の生活環境が向上し、また、地方における職場が増え、さらに二年間ぐらいの有給出産制度ができれば、出生率は高まるはずだ。日本経済の力が強くなれば、激動の世界の中でも、国が危くなることはない。

土地私有となれ合い文化

しかし、こうした改革は、非常にむずかしい。私達日本人が、土地の私的所有を非常に重要と考え、先祖代々の土地を所有し続けたいと願い、また、競争をさけて、すべての企業が共存共栄すべきだという信条は、伝統的な米(こめ)社会と深く結びついて形成されたものだ。

明治時代まで、日本の最大の産業は農業だった。現在でも、米農業は、あたかも国宝のように大切に保護されており、米文化は、私達の心の奥にまで入り込んでいる。

米社会では、集落の人々は、共同で灌漑(かんがい)施設をつくり、共同で水量を管理し、分に応じて水を使うという道徳に従って生きてきた。また、農家は先祖代々の農地を耕作し、それを子孫に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com